

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXVIII) <sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード：プルシャ、プラクリティ、未開展、第二十五、第二十六

[306 章]<sup>2</sup> (B.318 章, C.11724-11836, K.323 章)

ヤージュナヴァルキヤ仙は言った。

- (1) あなたは私に未開展の中にいる最高の者について尋ねた。この最高の秘密の質問 (に対する答え) を、心を集中して聞くがよい、王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Brahman in the Unmanifest, p.131.19)
- (2) ヴェーダの規定に従ってこの世界で遊行する私は、(師匠から) 軽んじられて<sup>3</sup>、もろもろの祭文を太陽神から与えられたのである、ミティラーの王よ。
- (3) 私は、大苦行によって、熱く燃える神に奉仕した。すると威力ある太陽神は喜び、私に話しかけたのである、罪なき者よ。
- (4) 「梵仙よ、贈物 (vara) を選ぶべし。汝にとって得難いものであっても望むものは何でも、喜んで与えるであろう。私の恩寵 (matprasāda) は実に得難いものである。」
- (5) そこで私は、頭礼し、熱している者たちの中の最上者に述べた。「未だ用いられていないもろもろの祭詞を<sup>4</sup>私はすぐに知りたいのです。」

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXVII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 9 号 (本号) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, Epic Chronology, JAOS.vol.24, pp.7-56, 1903.
- Strauss[1912]: Otto Strauss, Ethische Probleme aus dem “Mahābhārata”, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- Johnston[1937]: E.H.Johnston, Early Sāṃkhya, London,1937.
- Edgerton[1965]: Franklin Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, Grammar of Epic Sanskrit, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.
- 水野 [2014]: 水野善文「極楽・龍宮・錬金術 —インド諸文献の脈絡で—」南アジア言語文化第 8 号 東京外国語大学南アジア言語文化研究会 pp.27-71, 2014.

<sup>2</sup>この章には Edgerton の部分訳 (vv.52-56, 65, 68-79, 83-85, 88) がある。(Edgerton[1965]: pp.328-330)

<sup>3</sup>P.,K.: caratāvamatena ha B. caratāvanatena ha Ca. avamatena, amarśavaśāt guruto 'adhītāni yajūṃṣi ca tyaktvā / (avamatena とは、怒りのために、師匠から学んだもろもろの祭文を捨てて、という意味である) Cp. avamatena, gurvavajñātēna / (avamatena とは、師匠によって軽んじられて、という意味である) Deussen は yajus に関連して、白ヤジュルヴェーダ派の師子相承を記した Bṛhad. Upa.6.5.3 の参照を指示している。

<sup>4</sup>yajūṃṣi nopayuktāni Ca. nopayuktāni, matpūrvopādhyāyasyāgocarabhūtāni / (nopayuktāni とは、私の以前

- (6) すると至尊者は私に言った。「汝に与えるであろう、再生族よ。今や (iha) 女神サラスヴァティーは言葉となって、汝の身体に入るであろう。」
- (7) それから至尊者は私に言った。「自らの口を開けよ。」そこで私は口を開けると、口の中にサラスヴァティー神は入った。(Sandhi irregular: *tato me 'syam* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of *sandhi*, 1.2.6. -e' - < /-e ā-/ , p.28.15)
- (8) すると、私は火に焼かれたので、そこで水に入ったのである、無垢な者よ。偉大な太陽神に対しての無知と怒りのためである。
- (9) すると、焼かれている私に至尊の太陽神は言った。「しばし熱に耐えるべし (muhūrtaṃ sahyatām)。それから汝は涼しくなるであろう。」(Cf. Hopkins[1903]: meaning 'a short time' by *muhūrtaṃ*, p.10.27)
- (10) 涼くなった私を見て、至尊の太陽神は言った。「ヴェーダは、ウパニシャッドも含め、補遺と共に<sup>5</sup>汝において確立されるであろう、再生族よ。
- (11) 汝は、すべてのシャタパタを学ぶであろう<sup>6</sup>、雄牛のごとき再生族よ。それが終る時には、汝の意識 (buddhi) は再生しないもの (apunarbhāva) となるであろう。
- (12) サーンキヤとヨーガによって求められた望ましい境地に汝は到達するであろう。」これだけを言って、至尊者は西方の山に沈んだ。
- (13) それから繰り返し発せられる言葉を (anuvyāhṛtam) 聞き、光輝く神が去ると、家に帰って、満足した私は、サラスヴァティーを思った。
- (14) すると、大変に美しい女神サラスヴァティーが、母音と子音とで飾られ、オーム音を先頭に立たせて、私の前に現れた。
- (15) それから私は、規定に従い、サラスヴァティーに、そして輝く者たちの中の最高者 (である太陽神) に<sup>7</sup>、客用の水を<sup>8</sup>差し出した。そして、この (太陽神) に帰依しつつ座った。

の学習の領域に入っていない、という意味である) Cv. ayātayāmānity arthaḥ / (使い古されたものではない、という意味である)

<sup>5</sup>P. vedaḥ sottaraḥ sakhilo B., K.: vedaḥ sakhilāḥ sottaro Ca. sakhilāḥ / khilam, akṛtapadakramo vedabhāgaḥ / (khilam とは、語の吟誦法が定まっていないヴェーダの部分である) Cn. paraśākhīyaṃ svaśākhāyām apekṣāvaśāt paṭhyate tat khilam / (他の学派に属するものが、自学派において必要のために記される。それが khilam である) Cs. sottaraḥ sottaraṃ, sopaniṣatkam / (sottaraḥ とは、後半を伴う、すなわち、ウパニシャッドを伴うものである)

<sup>6</sup>śatapathaṃ caiva praṇeṣyasi Ca. śatapathaḥ, śatamārgapradarśī bahuyuktiko granthaḥ / (śatapathaḥ とは、百の道を示す、多くの論理からなる書物である) Cs. praṇeṣyasi, adhyeṣyase / (praṇeṣyasi とは、汝は学ぶであろう、という意味である) Cf. Hopkins [Great Epic]: reference to the Śatapatha Brāhmaṇa, p.7.26.

<sup>7</sup>P., B.: tapatām ca varīṣṭāya K. paraṃ yatnam avāpyaiva

<sup>8</sup>P., K.: arghyaṃ B. arthyaṃ

- (16) それから、すべてのシャタパタを、秘密の教義<sup>9</sup>、綱要、補遺をふくめて、最高に  
 歡喜しつつ学んだ<sup>10</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: reference to the Śatapatha Brāhmaṇa,  
 p.7.26)
- (17) (そして私は) これらのヴェーダの読誦を百人のすぐれた弟子たちに教えて、弟子を  
 もつ偉大な叔父の<sup>11</sup>不快の念を引き起こした<sup>12</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: reference  
 to the Taittiri dispute, p.8, fn.1)
- (18) そして、あなたの偉大な父の祭式 (yajña) は、弟子を伴った私によって、あたかも  
 太陽がもろもろの光線を用いるかのごとくに、完遂されたのである<sup>13</sup>、偉大な王よ。
- (19) (謝礼をめぐる) 叔父との争いの中で、私は自分のヴェーダ祭式の謝礼 (dakṣiṇā) と  
 して、(叔父側の) デーヴァラの目の前で<sup>14</sup>、その半分を取ったのである<sup>15</sup>。(Sandhi  
 irregular: *dakṣiṇayātha* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8 Double sandhi, 1.8.1. -ā- < /-as  
 a-/ , p.34.9)
- (20) スマントウによって、パイラによって、そしてジャイミニによって、それから、あ  
 なたの父によって、そして尊者たちによって、私 (の行為) は承認された<sup>16</sup>。
- (21) 十五の祭詞を<sup>17</sup>、私は太陽神から獲得したのである、罪なき者よ。そして、ローマハル  
 シヤから<sup>18</sup>、古潭 (purāṇa) を学んだのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: number of the  
 Yajur Veda schools , p.6, fn.1; the Purāṇa ascribed to Romaharṣa, p.47.27; Illustrations  
 of Epic Śloka Forms, p.453, No.25)
- (22) このようにサラスヴァティー女神を種子として敬い<sup>19</sup>、太陽神の力によって活動す  
 る私は、人々の王よ、

<sup>9</sup>sarahasya Cs. sarahasyam, sapaniṣatkam / (sarahasyam とは、ウパニシャッドを含むもの、という意味である)

<sup>10</sup>cakre Cn. cakre, karmakartari prayogaḥ, svayam evāvīrabhūd ity arthaḥ / (cakre に関して、対格が主格として用いられている。(シャタパタが) 自ら現れた、という意味である) Cs. sarsvatīprasādād adhitavān ity arthaḥ / (サラスヴァティーの恩寵によって理解した、という意味である)

<sup>11</sup>mātulasya Ca. mātulasya, śākalyasya / (mātulasya とは、シャーカリヤの、という意味である) Cn., Cp., Cs.: vaiśampāyanasya / (ヴァイシャンパーヤナの、という意味である)

<sup>12</sup>vipriyārtham Cv. vipriyārtham, viśeṣeṇa priyārtham / (vipriyārtham とは、とりわけ満足ののために、という意味である)

<sup>13</sup>P. vyāpto yajño B., K.: vyasto yajño

<sup>14</sup>miṣato devalasya Ca. mātulena vimarḍe kalahe devalasya mātulapakṣagrāhiṇaḥ miṣataḥ, spardhamānasya, śāstradvārā jītvā tau ity arthaḥ / (叔父との vimarḍa, すなわち、喧嘩において、devalasya, すなわち、叔父側につく者の、miṣatas, すなわち、対立者が、聖典を通して両者に勝って、という意味である)

<sup>15</sup>P. hṛtavān aham B. kṛtavāhanam K. hṛtavān vasu

<sup>16</sup>aham anumānitaḥ Ca. anumānitaḥ / satyasabhāpatisamṣmatyā mayā jitam ity arthaḥ / (anumānitaḥとは、真正の集会の長の同意によって、私は勝ったのである、という意味である)

<sup>17</sup>daśa pañca ca prāptāni yajūṃṣi Ca. daśapañcayajūṃṣi, pañcadaśaśākhābhinnāni yajūṃṣi / (daśapañcayajūṃṣi とは、十五のヴェーダ学派によって異なる祭詞を、という意味である) Cp. kāṇvamadhyaṃdinādīni / (カーンヴァ学派やマディヤンディナ学派などである) Ganguli は、'daśa pañca yajūṃṣi' を 'the five times ten Yajushes' と解している。(p.48.27)

<sup>18</sup>P. lomaharṣāc ca B., K.: romaharṣeṇa

<sup>19</sup>bījam etat puraskṛtya Cp. bījam, prañavam puraskṛtya, agre uccārya / (bījam とは、すなわち、聖音オームを、puraskṛtya とは、すなわち、最初に発して、という意味である)

- (23) シャタパタを教授するために<sup>20</sup>、かつてないヴェーダを作ったのである。望んだ通りの道を完成したのである。
- (24) 綱要と共に<sup>21</sup>完全な全体が、弟子たちに教授された。弟子たちはすべて清浄となり、この上なく歓喜した。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Divisions of Veda, p.7.28)
- (25) これら十五の学派と学問は太陽神によって示されたのである。(私はこれらを)望むままに伝達し<sup>22</sup>、その知るべき対象を (vedyam) 考察した<sup>23</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Divisions of Veda, p.7.28)
- (26) 神聖な天則 (ṛta)<sup>24</sup>とは何か、そしてこの上なき「知るべき対象」(vedyam) とは何か、私は考えた。そこにガンダルヴァがやって来て、私に質問した。
- (27) それからウパニシャッド (vedānta) の知識に通じたヴィシュヴァーヴァスは、ヴェーダについての二十四の質問をした後<sup>25</sup>、二十五番目として<sup>26</sup>論証学に関する<sup>27</sup>質問をした。(Cf.Hopkins[Great Epic]: A Gandharva, wise in the knowledge of Vedānta, p.94.8)
- (28) 一切とは何か。非一切とは何か<sup>28</sup>。雌馬とは何か。雄馬とは何か<sup>29</sup>。ミトラとは何か。ヴァルナとは何か<sup>30</sup>。知識とは何か。知識の対象とは何か。知者とは何か。無知

<sup>20</sup>kartuṃ śatapatham Cn. kartuṃ, prakāṭikartum / (kartum とは、明らかにするために、という意味である) Cp. adhyetum / (教える (学ぶ?) ために、という意味である) Cs. śatapathaprakāśātmakatayā aṅgāśāstram dharmāśāstram ca kartum udyato 'ham / (百の道の照明を本性とする、学派の聖典と法典とを、kartum、すなわち作成することを、私は意図している、という意味である)

<sup>21</sup>sasaṃgraham Ca. sasaṃgraham, anukramaṇikāvat / (sasaṃgraham とは、目次を伴って、という意味である)

<sup>22</sup>pratiṣṭhāpya Cs. pratiṣṭhāpya, śiṣyeṣu / (pratiṣṭhāpya とは、弟子たちに (伝達し)、という意味である)

<sup>23</sup>vedyaṃ tad anucintayam Ganguli: I now meditate on the great object of that knowledge (p.49.9) Deussen: man möge ..... als Gegenstand des Wissens überdenken (p.662, v.25) Cp. vedyaṃ, brahmatattvam / (vedyam とは、ブラフマンという真実を、という意味である) anucintayam は、Augmentless imperfect か。 Cf. Oberlies[Grammar]: 6.4.1. Augmentless imperfect, p.178ff. Deussen は anucintayet という C. の読みを採っている。(p.662, v.25)

<sup>24</sup>brahmanyam ṛtam Cn. brahmanyam, brāhmaṇājāter hitam / (brahmanyam とは、バラモン種姓にとって有益な、という意味である) この部分は、brahmany amṛtam と読むことも可能である。 Cp.,Cs.: brahmaṇi, vede / (brahmaṇi とは、ヴェーダにおける、という意味である) Cs. amṛtam paramapurusaṛtham / (amṛtam とは、人の最高の目的を、という意味である)

<sup>25</sup>P. caturviṃśatikān praśnān pṛṣṭvā vedasya B.,K.: caturviṃśāṃs tato 'pṛcchat praśnān vedasya Ca. caturviṃśatikān, prakṛtyā dehādibhūtāntān tattvacaturviṃśatisaṃbandhān / (caturviṃśatikān とは、本質的に、身体に始まり元素で終わる二十四原理に関連した (質問を)、という意味である)

<sup>26</sup>pañcaviṃśatimam Cp. pañcaviṃśatimam, pañcaviṃśatimaviṣayam / (pañcaviṃśatimam とは、二十五番目のものを対象とする、という意味である)

<sup>27</sup>P. ānvīkṣikīm tathā B.,K.: ānvīkṣikīm tadā Cn. śravaṇam anu īkṣā, yuktyālocanam anvīkṣā, mananam, tatpradhānām ānvīkṣikīm / caturviṃśatpraśnāḥ śrutyavaṣṭmbhena, pañcaviṃśo yuktyavaṣṭmbhenety arthaḥ / (聞 (śravaṇa) に従うのが īkṣā であり、論理による思考が anvīkṣā、すなわち、思 (manana) であり、それを本質とするものが ānvīkṣikī である。それを (質問した)、という意味である。二十四種の質問は、天啓聖典に依拠して、二十五番目の質問は、論理に依拠して、という意味である)

<sup>28</sup>viśvāviśvaṃ Cp. viśvāviśvaṃ, viśvāviśvakaḥ / tathā asvakaḥ svaśabdārthavācakaḥ / (viśvāviśvaṃ とは、一切と非一切からなるものは (?), という意味である。同様に、「自分のものではないもの」は、自分という語の意味を述べるものである)

<sup>29</sup>tathāśvāśvaṃ Ganguli: What is Aswa and what Aswa? (p.49.18) Deussen: die Stute? der Hengst? (p.662, v.28)

<sup>30</sup>P.,B.: tathāśvāśvaṃ mitram varuṇam eva ca K. tathā rājan puruṣam prakṛtiṃ tathā Cn. varuṇaśabdenāpaḥ,

な者とは何か<sup>31</sup>。「カ」とは何か。苦をもつ者とは何か。苦をもたない者とは何か<sup>32</sup>。  
太陽を食べる者とは何か。太陽とは何か<sup>33</sup>。そして学問とは何か。非学問とは何か<sup>34</sup>。

- (29) 知るべき対象とは何か。知るべきでない対象とは何か<sup>35</sup>。そして、王よ、動かぬものとは何か。動くものとは何か<sup>36</sup>。かつてなかったものとは何か。不滅とは何か。滅するものとは何か<sup>37</sup>。このようにすぐれた質問であった。
- (30) そこで私は言った、王よ。「最上のガンダルヴァの王は、順次、最上の意味ある問いを尋ねた。
- (31) 私がこのことを考える間、しばし許されたい<sup>38</sup>」と。「わかりました」と言って、彼のガンダルヴァは黙ってそこに座った。
- (32) それから、私は、さらに強くサラスヴァティー女神を思念した。すると、あたかもヨーグルトから乳酪 (ghṛta) が絞りだされるかのように、私の思考 (manas) によって質問 (の答えは引き出された)。
- (33) 私は、最高の論証学を考慮に入れて<sup>39</sup>、ウパニシャッドを、そして補遺を<sup>40</sup>、思考 (manas) によって攪拌したのである、王よ。

mitraśabdena sūryaḥ / tābhyāṃ saguṇanirguṇe ucyete / (ヴァルナの語によって水神が、ミトラの語によって太陽神が言われている。両者によって、saguṇa と nirguṇa が言われている) Cp. mitraśabdārthaṃ varuṇaśabdārthaṃ papracchety arthaḥ / (ミトラの語の意味を、ヴァルナの語の意味を質問した、という意味である)

K. はこの詩節の後に次のような 1 行を挿入している。(この前半は、MBh.XII.778\*の後半と一致している)

tathaiva puruṣavyāghra mitraṃ varuṇam eva ca / (そして、虎のごとき人よ、ミトラとは何か。ヴァルナとは何か。)

<sup>31</sup>tathājño `jñāḥ Cn. ajñatvājñatve tayoh svābhāvike eva, na tv aupādhike, pramāṇābhāvāt / (ajñatvājñatva とは、両者は本質的であって、付随的ではない。認識手段が存在しないので)

<sup>32</sup>kas tapā atapās tathā Cp. kes tapāḥ, kaś ca śabdārthas tapāśabdavācyāḥ / (kes tapāḥ とは、tapāḥ という語によって述べられるべき語の対象は何か、という意味である) N. ya eko bhūmānandaḥ sa eva tapāḥ ālocanakartā akāśākhyāḥ / (大地を喜ぶ唯一の者、それが tapāḥ であり、観察を行う者で、虚空と呼ばれる) Ganguli: Who is Kah? Who is possessed of the principle of change? Who is not possessed of the same? (p.49.20-22) Deussen: der Ka? der Leidende? der Nichtleidende? (p.662, v.29)

<sup>33</sup>P.,B.: sūryādaḥ sūrya iti ca K. sūryātisūrya iti ca Cn. sūte viśvam iti sūryo māyāvī, tam atīti sūryādaḥ / (一切を産む (sū) から sūrya と言われるものは、超自然力をもつ (?). それを食べるから sūryādaḥ である) Cp. sūryā prakṛtir ity uktam stambhanīyatvāt / asūryaḥ prakāśanīyaḥ, na tu stambhanīyaḥ / (太陽神の妻はブラクリティであると言われる。停止されるべきであるから。asūrya(?暗黒) は照明されるべきものであるが、停止されるべきものではない)

<sup>34</sup>vidyāvidye Cn. upāsanaiva vidyā, tadabhāvo `vidyā / (vidyā とは同置であり、avidyā とは、それがないことである)

<sup>35</sup>vedyāvedyam Cp. vedyam avyaktam jaḍatvāt / avedyaḥ svaprakāśatvāt / (vedyam とは、非精神性の故に、未顕現のものである。avedyaḥ 知の対象ではないものは、自らの照明性の故である)

<sup>36</sup>acalam calam Cn. dvividham hi brahmaṇi dharmajātam śrūyate, acalam calam ca / tatra apahatapāp-matvādisatyasaṃkalpāntam acalam, aṇutvasthūatvādikam anityam / (ブラフマンにおいて、acala と cala という二種の性質が生じたと伝えられている。そのうち滅罪性など真実の思考に終わるものが acala であり、極小性・粗大性などからなるものは無常 (=cala) である)

<sup>37</sup>P.,B.: apūrvam akṣayaṃ kṣayam K. avyayam cākṣaram kṣeyam Cn. apūrvam, upāsteḥ pūrvam avijñātam / (apūrvam とは、祭式にかつて認められていなかったもの、という意味である)

<sup>38</sup>P. muhūrtaṃ mṛṣyatām B.,K.: muhūrtaṃ uṣyatām

<sup>39</sup>dṛṣtvā cānvīkṣikīm parām Cn. parām ānvīkṣikī, śrutidarśitām yuktim / (parām ānvīkṣikīm とは、天啓聖典に示された論理を、という意味である)

<sup>40</sup>pariśeṣam Cn. pariśeṣam. śruter vākyaśeṣabhūtam tarkam / (pariśeṣam とは、天啓聖典にとって補充されるべき文章である論理を、という意味である)

- (34) この第四の<sup>41</sup> 学問は、王の中の虎よ、死後に関する (sāmparāyikī) ものである。私は、第二十五 (番目の原理) に関して確立されたものとして<sup>42</sup>それをあなたに (前章で) 語った。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Divisions of Veda, p.7.29)
- (35) さて王よ、私は、(ガンダルヴァの) 王ヴィシュヴァーヴァスに言った。「汝はここで私に尋ねた質問 (に対する答え) について聞くがよい。
- (36) 「一切」とは何か。「非一切」とは何かと (iti) 汝は尋ねた (v.28), 力あるガンダルヴァよ。「一切」(viśvā) とは、最高の未顕現である (avyaktaṃ paraṃ) と知るべし。それは過去と未来に恐怖を与えるものである<sup>43</sup>。
- (37) そして (未顕現は) グナを作るものであるから、三種のグナ (guṇa 属性) からなると (知るべし)。そして「非一切」とは<sup>44</sup>部分なきものである。そして「馬」も同様に<sup>45</sup>一対 (mithuna) であると観察される。
- (38) プラクリティは未顕現であり、ブルシャは属性なきもの (nirguṇa) である。そして、「ミトラ」は<sup>46</sup>ブルシャであり、「ヴァルナ」はプラクリティである。(Sandhi irregular: *puruṣeti ca nirguṇam* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8.Double Sandhi, 1.8.3. -e- < /-as i-/ , p.36.17)
- (39) 「知識」は<sup>47</sup>プラクリティであり、「知識の対象」は部分なきものである。「無知な者」と「知者」はブルシャであり、したがって、部分なきものと言われる<sup>48</sup>。

<sup>41</sup>caturthī Ca. caturthī, trayīvārtādaṇḍanīnām vyavasthāpikā / (caturthīとは、三ヴェーダ学・農商学・司法学を確立させるものである) Cn. trayīm vārtām daṇḍanīnīm cāpekṣya / (三ヴェーダ学・農商学・司法学を考慮して、(第四) という意味である) Cs. śravaṇamanamadhyānāśrayāṇām anantarabhāvitvāc caturthī / (聞・思・修の専念の直後に生じるから第四である)

<sup>42</sup>P. pañcaviṃśe 'dhi dhiṣṭhitā B. pañcaviṃśād adhiṣṭhitā K. pañcaviṃśā 'dhiṣṭhatā Ca. pañcaviṃśe ātmani / (pañcaviṃśe とは、すなわちアートマンにおいて、という意味である) Cn. pañcaviṃśaḥ śarīraḥ, tam adhiṣṭhya sthitā / (pañcaviṃśaḥとは、身体であり、それに関して確立された、という意味である)

<sup>43</sup>bhūtabhavyabhayaṃkaram Cn. bhūtabhavyarūpaṃ yad bhayaṃ, saṃsāras tat karotīti bhūtabhavyabhayaṃkaram / (bhūtabhavyabhayaṃkaram とは、輪廻は、過去と未来の姿をした恐怖を作る、ということである)

<sup>44</sup>P. aviśvo B.,K.: viśvānyo Cn. duḥkhadā viśvā / tadanyo 'viśvo niṣkala ātmeti siddham / (viśvā は、苦を与えるものである。それとは別である aviśvaḥは、niṣkalaḥ, すなわち、アートマンである、ということは確立している)

<sup>45</sup>P. aśvas tathaiva B. aśvas cāśvā ca K. viśvāviśveti

<sup>46</sup>mitraṃ Cp. mitraṃ mideḥ snehārthatvena ānandarūpasya ca tasya snehaviśayatvān mitratvam / varuṇam āvarakatvāt prakṛtiṃ prāhur ity arthaḥ / (mitra は、動詞語根 mid は愛情という意味をもつので (cf.Dhātupāṭha 10.8), 彼 (mitra) の歡喜の姿は愛情の対象であるから, mitra の性質のもつ。ヴァルナを、覆うもの (āvaraka) という性質をもつために、人々はプラクリティと言った、という意味である)

<sup>47</sup>jñānaṃ Cn. jagajjanmādyupayogi jñānaṃ tanmāyāvṛttirūpatvāt prakṛtiṃ eva / yas tu tena jñānena pramāṇavṛttirūpeṇa janyate tatpramāṇaphalabhūtaṃ pramārūpaṃ jñānaṃ vedānteṣu jñeyam ity ucyate / (世界の誕生などに適用される「知識」は、その幻影の働きを本質とするので、プラクリティに他ならない。しかしその認識手段の働きを本質とする知識によって生じる知識は、その認識手段の結果として、真知 (pramā) を本質とするので、もろもろのウパニシャッド (vedānta) において「知識の対象」と言われる) Cp. jñānaṃ buddhirūpeṇa vṛttijñānahetutvāt / jñeyam avidyātirodhānadūrikaraṇena / (認識の姿として存在の (?) 知識の原因であるので, jñāna と言われ、無知の消滅を遠ざけるので jñeya と言われる)

<sup>48</sup>P.,B.: ajñāś ca jñāś ca puruṣas tasmān niṣkala ucyate K. ajñam avyaktaṃ jñas tu niṣkala ucyate Cn. brahmaṇyaupādhyakau jīveśabhāvau śrūyete, tena upādhyapagame tāv ubhāv api niṣkalam eva brahmeti bhāvaḥ / (神聖

- (40) 「カ」と「苦をもつ者」<sup>49</sup>と「苦をもたない者」が言われた (v.28)。「カ」とはこのプルシャであると言われる。「苦をもつ者」はブラクリティであると言われ<sup>50</sup>、「苦をもたない者」は部分なきものと伝えられている<sup>51</sup>。
- (41) 同様に、「知るべきでない対象」とは未顕現のものであり、「知るべき対象」とはプルシャである、と言われる。汝によって「動くもの」と「動かぬもの」とが言われたが (v.29)、それについても私の言うことを聞くべし。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *avedyam avyaktam*, pp.117.18, 136.32, *vedyaḥ puruṣaḥ*, p.136.32)
- (42) 「動くもの」とはブラクリティであり、帰滅と創造の<sup>52</sup>原因であると言われている。「動かぬもの」とは、帰滅と創造の非行為者である<sup>53</sup>プルシャであると伝えられている<sup>54</sup>。
- (43) 両者は不生であり、子孫をもたず、両者とも不滅である<sup>55</sup>。両者は、不生にして<sup>56</sup>永遠である、と内我の状態を確信している人々は言った<sup>57</sup>。(Sandhi irregular: *ca akṣayau*

な支配者と限定的な個我の状態が伝承されている。限定が除去されれば、その両者とも *niṣkalam*, すなわち、ブラフマンである、という意味である) Cs. *yasmāt puruṣaḥ ajñānasyāśrayo janmādirahitaś ca tasmān niṣkalo niravayava ity arthaḥ* / (プルシャは、無知の拠り所であり、誕生などを欠いているので、それ故、*niṣkalaḥ*, すなわち、部分をもたない、という意味である)

<sup>49</sup>kas tapā Cn. *kaḥ ānandaḥ, tapāḥ avyaktam tau ca krameṇa puṁprakṛti ity arthaḥ* / (kaḥとは歓喜であり、tapāḥとは未顕現のものである。それぞれプルシャとブラクリティである、という意味である)

<sup>50</sup>P. *tapāḥ prakṛtir ity āhur* B.,K.: *tapās tu prakṛtiṁ prāhur* Ca. *prakṛtiḥ stambhaniyatvāt* / ((苦をもつ者は) 停止されるべきであるから *prakṛti* である)

<sup>51</sup>K. はこの詩節の後に次のような2行を挿入している。(MBh.XII.779\*)

*sūryam avyaktam ity uktam atisūryas tu niṣkalaḥ /  
avidyā proktam avyaktam vidyā puruṣa ucyate /*

(太陽は未顕現と言われる。一方、太陽を越える者は、部分なき者である。)

(無知は未顕現であり、知はプルシャである、と言われる。)

これによって、第28詩節 ef 句でガンダルヴァが問い、P.,B. では答えられていない *sūrya-sūryāda* と *vidyā-avidyā* について答えられている。

<sup>52</sup>P.,K.: *kṣepasargayoḥ* B. *kṣayasargayoḥ*

<sup>53</sup>P.,K.: *akṣepasargayoḥ kartā* B. *ākṣepasargayoḥ kartā* Ca. *akṣepasargayoḥkartā ity aluksamāsaḥ / tena kṣepasargayor akartety arthadh / (akṣepasargayoḥkartā というように格変化語尾の消えない合成語である (Cf.Pāṇini VI.3.24)。従って帰滅と創造の非行為者である、という意味である) Cn. prakṛtir vikriyamāṇā jagallopodayakartṛi, puruṣas tv avikriyamāṇa eva tatkarteti ślokarthaḥ / (ブラクリティは、変異しつつ、世界の消滅発生を行う者であるが、しかしプルシャは、変異することなく、それを行う者である、というのがこの詩節の意味である)*

<sup>54</sup>B. はこの詩節の後に、次の行を挿入している。

*tathaiva vedyam avyaktam avedyaḥ puruṣas tathā /*

(同様に「知るべき対象」は未顕現であり、「知るべきでない対象」はプルシャである。)

この行の意味は、第41詩節 ab 句 (=B.42ab) の内容と反対になっている。

<sup>55</sup>P. *ajāv ubhāv aprajau ca akṣayau* B.,K.: *ajñāv ubhau dhruvau caiva akṣayau* Ca. *ajau, ajananahetū / puruṣasamnidhānasya, anayā bhūtasargaṁ karotītūcchāyās ca abhāvāt / prakṛter api sargāsamarthyāt / (ajau とは、誕生の原因をもたない、という意味である。プルシャに近接した者には、これ(ブラクリティ)によって生き物の創造を行うという願望が存在しない故に。ブラクリティにとっても、創造の能力がない故に) Cn. (reading *ajñau*) yathā prakṛtir jaḍātīvāt svātmānaṁ na jānāty evaṁ niṣkalātmāpi svātmani vṛttitirodhāt svātmānaṁ na jānāntīy ata ubāv apy ajñau / (ブラクリティは、意識なき者であるから、自分自身を知らない。それと同様に、部分なきアートマンも、自分自身における働き (vṛtti) が消滅しているから、自分自身を知らない、というように両者とも無知である)*

<sup>56</sup>ajau Cn. *ajau nityau / dvitvam avivakṣitam / tena yad akarmaphalaṁ tad ajam tad eva ca nityam ity arthaḥ / (ajau とは永遠である、という意味である。二つであることは意図されていない。何であれ無行為を結果としてもつ者は不生であり、それこそは永遠である、という意味である)*

<sup>57</sup>P.,K.: *prāhur adhyātmagatiniścayāḥ* B. *prāhur adhyātmagatiniścayāt*

Cf.Oberies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. *-a/ā a/ā-*, p.2.11)

- (44) (プラクリティは)生産において不滅であるから<sup>58</sup>,不生にして不変と言われる<sup>59</sup>。プルシャは「不滅」であると言われる。プルシャには滅は存在しない故に。(Sandhi irregular: *prajanane ajam* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. *-e a-*, p.20.2)
- (45) プラクリティは,グナが滅するものであるから,(そして)行為者であることから<sup>60</sup>不滅である,と目覚めた人々は(言った)。以上があなたに対して(述べられた)死後に関する第四の論証学 (*ānvīkṣikī vidyā*) である。(Sandhi irregular: *eṣā te ’nvīkṣikī vidyā* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.2 Special cases of *sandhi*, 1.2.6. *-e ’- < / -e ā-*/, p.28.15)
- (46) 日常行われるべき義務において (*nityakarmanī*), 行為によって<sup>61</sup>, 学問をそなえた財産をなすならば, あらゆるヴェーダは唯一のものを示す<sup>62</sup>, と伝えられているのである, ヴィシュヴァーヴァスよ。
- (47) ヴェーダの目的である「知るべき対象」を知らない人々は<sup>63</sup>, それから逸れた状態で, その中で生まれ, そして死ぬのである, すぐれたガンダルヴァよ。
- (48) ヴェーダ支分と補助支分と共に<sup>64</sup>五種のヴェーダを<sup>65</sup>学んでも, ヴェーダによって知るべき対象を知らないならば, その者は, ヴェーダという荷物を運んでいるにすぎない。

<sup>58</sup>akṣayatvāt Ca. akṣayatvāt, prakṛter apacayopacayābhyām atyantānāśābhāvāt / (akṣayatvāt とは, プラクリティは, 減少し増大するので, 最終的な消滅は存在しないから, という意味である)

<sup>59</sup>āhur avyayam Cn. yad ajam ākāśādi tad evāvvyayam ity āhur akṣapādādaya ācāryāḥ / (虚空など不生のものは不変であると, アクシャパーダなどの論師たちは言った)

<sup>60</sup>karṣṭvāt Cn. karṣṭvāt / kākākṣivad ayaṃ hetur ubhayatrāpi sambadhyate / (karṣṭvāt に関して, カラスの眼(球が一方から他方へ移動するか)のように, この理由は両方に結びついている)

<sup>61</sup>karmanā Cn. karmanā gurūpasadanādinā / (karmanā とは, 師匠への奉仕などの行為によって, という意味である)

<sup>62</sup>ekāntadarśanā vedāḥ Ca. ekāntadarśanāḥ, ekasya ekasamsārāntasyātmano darśakā jñātāro, vedāḥ / (ekāntadarśanāḥとは, 一つの輪廻が終わる一人のアートマンの, 指示者たち, すなわち, 知己たちが, vedāḥ もろもろのヴェーダである) Cp. ekaḥ advitīyaḥ antaḥ saṃsārasāgarapāre vartamāno yaḥ paramātmā tam eva darśayantīty arthaḥ / (ekaḥ すなわち, 第二をもたない, antaḥ すなわち, 輪廻の海の対岸に存在する, 最高のアートマン, まさしく彼を指し示す, という意味である) Cs. ekasminn advitīyātmani antarniṣayaṃ draṅṣyantīty ekāntadarśanāḥ sarve vedāḥ, ātmaikatvapratipādkāḥ / vedaiś ca sarvair aham eva vedyaḥ iti smrteḥ / (あらゆるヴェーダは, ekāntadarśanāḥ, すなわち, 唯一の, 第二のものなき, アートマンにおける内的確信を知らせるものである。すなわち, アートマンの唯一性を理解させるものである。「私こそが, あらゆるヴェーダによって知られるべき対象である」(MBh.VI.37.15c) という伝承聖典があるから)

<sup>63</sup>jāyante ca mriyante ca yasminn ete yataś cyutāḥ / vedārthaṃ ye na jānanti vedyam Cn. ete viyadādyāḥ yasminn adhiṣṭhāne jāyante liyante ca taṃ vedārthaṃ, vedapratipādyam vedyam ātmānaṃ, ye na jānanti te yataś cyutā bhavanti tan nityam iti pūrvānuṣaṅgaḥ / (ete, すなわち, 虚空などは, yasmin, すなわち, あるものの支配下において, jāyante, 生まれ, 滅する。その vedārthaṃ, すなわち, ヴェーダによって理解されるべきもの, vedyam, すなわち, アートマンを, ye na jānanti, 知らない者たちが, yataś cyutā, そこから逸脱するもの, それが永遠の存在である, というように前後が結合している)

<sup>64</sup>sāṅgopāṅgān api Cs. aṅgaṃ, vyākaraṇādi / upāṅgaṃ, prātiśākyādi / (aṅgaṃ とは, 文法学などを, upāṅgaṃ とは, 音韻学などを, という意味である)

<sup>65</sup>pañca vedān Cs. pañcamo vedāḥ, itihāsaḥ / 第五番目のヴェーダとは, 「古伝」である

- (49) 乳酪を求める者が、雌口バの乳を攪拌するならば<sup>66</sup>、すぐれたガンダルヴァよ、そこに糞便 (のごとき臭いのするもの) を見て、醍醐も乳酪も見ることはないであろう。
- (50) 同様に、ヴェーダの知識をもちながら、「知るべき対象」と「知るべきでない対象」を<sup>67</sup>見出すことのない者は、ただ愚かな考えをもつ者であり、知識と言う荷物を運ぶ者であると伝えられている。
- (51) この両者は<sup>68</sup>それに専心する内的アートマンによって、この者 (内的アートマン) に誕生と死が繰り返して生じることのないように、常に観察されるべし。
- (52) 終わりなき誕生と死について考察し、この三つ (の祭式) を<sup>69</sup>滅するものとしてここで放棄して、(人は) 不滅の教え (dharma) に近づくのである。(Sandhi irregular: *ihā akṣayaṃ* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. *-a/ā a/ā-*, p.2.11)
- (53) しかし、日ごと日ごと (ahany ahani)、(この教えを) 絶えず (atyantam) 見る時<sup>70</sup>、カーシュヤパよ<sup>71</sup>、彼は独存者となり (kevalībhūta)、第二十六を見るのである。
- (54) 未顕現は常に第二十五とは異なる<sup>72</sup>、と (考える) 者は、(両者を) 二つと見るであろう<sup>73</sup>。善き人々は、それを同一である (と見るのである)。(Cf. Hopkins[Great Epic]: doctrine of the twenty-sixth, p.137.3)
- (55) 従ってこのように、最高を求めるヨーガ行者たちとサーンキヤに従う人々は、誕生と死を恐れるが故に、第二十五を不動の者と (acyutam) 認めないのである<sup>74</sup>。」

<sup>66</sup>kharikṣīraṃ mathed Ca. kharikṣīramanthane viṣṭāvad gandho bhavati / (雌口バの乳を攪拌すると、糞便のごとき臭いが生じるのである)

<sup>67</sup>vedyam aveyam Cn. aveyam prakṛiṭh, vedyam brahma / (aveyam とは、ブラクリティであり、vedyam とはブラフマンである)

<sup>68</sup>etau Ca. etau, prakṛtipuruṣau / (etau とは、ブラクリティとプルシャは、という意味である)

<sup>69</sup>trayīm imām Cs. imām, karmaniṣṭhām / (imām とは、祭式に関するものを、という意味である) N. trayīm karmkāṇḍoktaṃ dharmam / ((ヴェーダの) 祭式を記述した部分に説かれた三種の教えを、という意味である)

<sup>70</sup>P. yadā tu paśyate B.,K.: yadā 'nupaśyate Cn. paśyate, drśyate, karmaṇi taṅ / ātmeti śeṣaḥ / (paśyate 見る (反照態) は、drśyate 見られる (受動態)、という意味である。反照態 (ātmanepada) の活用語尾は (「見る」という行為の) 直接目的に言及する。(従って受動態では、直接目的となる語が) ātmā 「アートマンは」と (主格として) 補われなければならない)

<sup>71</sup>kāśyapa Ca. kāśyapeti kāśyapāpatyatvād viśvāsoḥ saṃbodhanam=/ (kāśyapa とは、ヴィシュヴァーヴァスがカーシュヤパの子供であるための呼格である)

<sup>72</sup>anyaḥ pañcaviṃśakaḥ Cp.,Cs.: pañcaviṃśako 'pi sopādhikaḥ saṃsāri gṛhākāśasthānīyaḥ pratibimbakalpaḥ / (第二十五も、限定を伴う存在であり、輪廻する者である。瓶の中の虚空にある (月の?) 影像のごときものである) (Cs.: pañcaviṃśako jīvātmā kevalabhūtaḥ śuddhādhitīyasvabhāvaḥ / (第二十五は、個我を本質として単独に存在し、並ぶものなき清浄さを本性とする者である))

<sup>73</sup>P. tasya dvāv anupaśyeta B. tasya dvāv anupaśyetaṃ K. tatsṭhaṃ samanupaśyanti Cn. (reading *anupaśyetaṃ*) anudrśyetaṃ / atrāpi karmaṇi taṅ, saṃbhāvanāyāṃ loṭ / pṛthag iva saṃbhāvyete ity arthaḥ / (anupaśyetaṃ (反照態) は、drśyetaṃ 両者は見られるであろう (受動態)、という意味である。ここでも反照態の語尾は直接目的に言及する。(受動態では、直接目的は、対格ではなくて主格 dvau に置かれる。) 可能性の意味で命令法の語尾が用いられている。従って「両者は、別々であるかのように存在するであろう」という意味である)

<sup>74</sup>P. tenaitan nābhijānati pañcaviṃśakam acyutam B.,K.: tenaitaṃ nābhinandanti pañcaviṃśakam acyutam Cs. te sādhaḥ enaṃ pañcaviṃśakam acyutaṃ nābhijānanti na, kiṃ tu jīvaṃ paramātmānam eva jānanti arthaḥ / (彼ら善き人々は、この第二十五を不動の者と認めないのである。そうではなくて、彼らは、個我は最高我に他ならない、と知るのである、という意味である)

ヴィシュヴァーヴァスは言った。

- (56) あなたに対して語られた (te proktam) 第二十五は、最高のバラモンよ。そのとおりなのか、あるいはそのとおりではないのか<sup>75</sup>。御身は、このことをお話し下さい。
- (57) ジャイギーシャヴィヤの、アシタ・デーヴァラの (講説を) 私は聞いた。聖人パラシヤラの、賢者ヴァールシャガニヤの、(cf.Hopkins[Great Epic]: a list of teachers of the twentyfifth (spiritual) principle, p.98.2; Johnston[1937]: *Jaigīṣavya* in the list of Sāṃkhya seers, p.9.6)
- (58) 乞食者たるパンチャシカの<sup>76</sup>、そしてカピラの、シュカの、ガウタマの、アールシュティセーナの、偉大なるガルガの、
- (59) ナーラダの、アースリの、また賢者プラスティヤの、サナトクマーラの、それから偉大なるシュクラの、
- (60) そして父カシュヤパの (講説を) かつて私は聞いた。そのすぐ後、ルドラの、賢者ヴィシュヴァールーパの (講説を聞いた)。(Hopkins[Great Epic]: *Hypermetric Śloka, tadanataraṃ ca rudrasya* (c 句 9 音節), p.255.19)
- (61) 神々から、祖先たちから、ダイティヤたちから、順次、すべては私のところに来た。彼らは常に「知るべき対象」を語る。
- (62) それゆえ、それを御身の認識 (buddhi) を通して聞くことを私は望むのである、バラモンよ。御身は、最も卓越し、もろもろの聖典に精通し、とりわけすぐれた知性をもつ方 (atibuddhimān) であるから。
- (63) あなたに知られていないことは何もない。御身は天啓聖典の蔵であると伝えられている。(そのように) 神の世界でも、祖先の世界でも語られている、バラモンよ。
- (64) ブラフマンの世界に行った偉大な聖仙たちも (あなたのことを) 語る。そして常に輝く者たちの王である太陽も、あなたについて語っている。
- (65) バラモンよ、あなたによって、すべてのサーンキヤの知識は獲得された。同様にヨーガの知識も<sup>77</sup>詳細に (viśeṣatas) 獲得されたのである、ヤージュナヴァルキヤ仙よ。

<sup>75</sup>P. tathā tan na tathā veti B. tathā tan na tathā ceti K. tad ahaṃ na tathā vedmi

<sup>76</sup>P. bhikṣoḥ pañcaśikhasyātha B. bhrgoḥ pañcaśikhasyāya K. bhikṣoḥ pañcaśikhasyāya K. は、P. と B. を折衷した形になっている

<sup>77</sup>P. yogajñānaṃ ca B.,K.: yogaśāstraṃ ca B.,K. は、yoga と jñāna の結びつきを避けたか。Cf.Hopkins[Great Epic]: *śāstra* of Yoga opposed to *jñāna* of Sāṃkhya, p.100.25.

- (66) あなたは疑いもなく覚醒し<sup>78</sup>、動くものと不動のものを認識している。その醍醐からなる乳酪のごとき<sup>79</sup>知識を私は聞きたい。

ヤージュナヴァルキヤは言った。

- (67) 私は汝をすべてをもつ者と考える、すぐれたガンダルヴァよ。そしてなお私の言うことを知らんと願っている、王よ。それを伝えられた通りに聞くべし。
- (68) 第二十五は、認識することのないプラクリティ (prakṛti 根本原質) を<sup>80</sup>認識する (budhyate)。しかし、ガンダルヴァよ、プラクリティは第二十五を認識することはない (na budhyati)。 (Cf.Hopkins[Great Epic]: doctrine of the twenty-sixth, p.137.3)
- (69) 真理を知るサーンキヤとヨーガに従う者たちは、天啓聖典の教示に従って<sup>81</sup>、この無知のために<sup>82</sup>、それ (プラクリティ) を (物質の) 第一原因と呼ぶのである<sup>83</sup>。
- (70) 他方 (第二十五) は、見ることもあれば見ないこともある、というように見るのである、無垢な者よ<sup>84</sup>。第二十六は、第二十五と第二十四を見るのである<sup>85</sup>。しかし、それ

<sup>78</sup>prabuddhas tvam Cs. prabuddhaḥ, aparokṣatvena jñātavān / (prabuddhaḥとは、明確に知っている、という意味である)

<sup>79</sup>ghṛtaṃ maṇḍamayaṃ yathā Cs. ghṛtaṃ maṇḍamayaṃ yathā, dugdhitāṃ navanītaṃ sphuṭaṃ dugdhasya śare niḥsāryamāṇe śarāt kevalān navanītaṃ sāraṃ labhyate tadvat / (ghṛtaṃ maṇḍamayaṃ とは、牛乳から搾られた透明な乳酪 (navanīta バター) である。yathā とは、牛乳の乳皮 (クリーム) が生じる時、乳皮だけから最上の乳酪は得られる。それと同様に (すぐれた知識のみからすぐれた知識は得られる)、という意味である)

<sup>80</sup>P.,B.: abudhyamānāṃ prakṛtiṃ K. budhyamāno hi prakṛtiṃ K. は、*budhyamāna* を *puruṣa* の性格としている。

<sup>81</sup>yathāśrutinidarśanat Cs. yathāśrutinidarśanat, vedāntaśrutim anatikramya tajjanyaniścayād ity arthaḥ / (yathāśrutinidarśanat とは、ウパニシャッドという天啓聖典を逸脱することなく、それより生じるべき確信によって、という意味である)

<sup>82</sup>P. anenāpratibodhena B.,K.: anena pratibodhena Ca. (reading *anena pratibodhena*) anena, prakṛtivate-kadarśanābhāvavātā pratibodhena / (anena, すなわち、プラクリティを区別する知見が存在しない、pratibodhena 認識によって、という意味である) Cn. anena pañcaviṃśena bodhapratibimbātmanā pratibodhena / (anena, すなわち、第二十五による認識の映像を本性とする、pratibodhena 認識によって、という意味である)

<sup>83</sup>pradhānaṃ pravādanti Cn. pradhīyate 'smiñ citicchāyeti yogāt pradhānam / etena citicchāyāpannā buddhir evāhaṃpratyayaviśaya ity uktam / (そこに知の像が置かれる (pradhīyate) という語源の意味によって、pradhāna (第一原因) である。このため、知の像に近接された統覚 (buddhi) は、「私」という観念を対象とする、と言われる)

<sup>84</sup>P. paśyaṃs tathaivāpaśyaṃs ca paśyaty anyas tathānagha B.,K.: paśyaṃs tathaiva cāpaśyan paśyaty anyah sadānagha Cv. anyah jīvākhyah pañcaviṃśakah, paśyan dehagehādikam, paramātmānam apaśyaṃs ca paśyati / (anyah とは、個我と呼ばれる第二十五である。それは、paśyan, すなわち、身体や家などからなるものは見るが、apaśyan, すなわち、最高我を見ることなく、paśyati 見るのである) Cn. cidābhāsād anyah sākṣī paśyan, jāgradādaupumprakṛtyor vivekakyātikāle vā paśyan, savikāram caturviṃśaṃ pañcaviṃśaṃ ca paśyati / apaśyan, susuptyādaunirvikalpakasamādhau ca, śaḍviṃśaṃ paśyati / etena yaḥ sākṣī sa eva sākṣyena sambaddhaś cety pañcaviṃśo bhavati, sākṣyena viyutaḥ śaḍviṃśa ity uktam / (anyah, すなわち、知の幻影 (?) と異なる観察者は、paśyan, すなわち、目覚めている時などに、あるいはブルシャとプラクリティの相違を認識する時に、変異を伴う第二十四と第二十五を見る。apaśyan, すなわち、熟睡時などにおいて、そして無想三昧において、第二十六を見るのである。従って、同一の観察者が、観察対象に結びついているならば、第二十五であり、観察対象と離れているならば、第二十六と言われるのである)

<sup>85</sup>P. śaḍviṃśaḥ pañcaviṃśaṃ ca caturviṃśaṃ ca paśyati B.,K.: śaḍviṃśaṃ pañcaviṃśaṃ ca caturviṃśaṃ ca paśyati Ca. śaḍviṃśaṃ, śaḍviṃśaṃ yam ātmānam, īśvaraṃ vā, pañcaviṃśaṃ saṃsāricetanavat, caturviṃśaṃ prakṛtiprakṛtavikārarūpaṃ jñātvā tattvato niścinioti / (śaḍviṃśaṃ, すなわち、アートマンあるいは自在神を、pañcaviṃśaṃ, すなわち、輪廻する者の意識をもつ者を、caturviṃśaṃ, すなわち、プラクリティによってかつて創造された変異物の姿を、知って、正しく決定するのである) Cv. śaḍviṃśas tu pañcaviṃśaṃ jīvaṃ, caturviṃśaṃ jaḍam ca paśyati / (しかし śaḍviṃśaḥ, 第二十六は、pañcaviṃśaṃ, すなわち、個我と、caturviṃśaṃ, すなわち、精神性のないものとを、paśyati, 見るのである)

(第二十六) を観察する者 (anupaśyati) は、(第二十六を) 見えても見ないのである<sup>86</sup>。

(71) 第二十五は、「私より高位のものは<sup>87</sup>他にない」とうぬぼれるであろう<sup>88</sup>。第二十四は、知識によって見る人々によって (manujair jñānadarśibhiḥ) 捉えられないものではない<sup>89</sup>。

(72) 魚が水に従い<sup>90</sup>、(自分の) 行動によって動くのと同様である。魚が(水を) 知っているように、彼(第二十五)もまた(第二十四を) 知っている。住いを共にしているので、愛情をもち、そして常に自意識をもっているから<sup>91</sup>。(Sandhi irregular: *matsyevodam anveti* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8. Double Sandhi, 1.8.3. -e- < /-as i-/ , p.36.18) (Cf. Hopkins[Great Epic]: doctrine of the twenty-sixth, p.137.11)

(73) 彼(第二十五)は、(第二十六と) 同一であることを知らない時には<sup>92</sup>時が進むにつれて沈み、所有意識に囲まれない(?) 時には<sup>93</sup>時が進むにつれて浮かぶのである<sup>94</sup>。

(74) しかし、再生族が「私はこれとは異なる」<sup>95</sup> と考える時、彼は独存者となり<sup>96</sup>、第二十六を見るのである。

(75) 王よ、すぐれたものなき者 (avara) と第二十五は別である<sup>97</sup>。(第二十六は) そこ(第

<sup>86</sup>na tu paśyati paśyaṃs tu yaś cainam anupaśyati Cv. yaḥ paramātmā enam jīvaṃ paśyati taṃ paśyantaṃ ayaṃ paśyati / (yaḥ, すなわち, 最高我は, enam, すなわち, 個我を, paśyati, 見る。その見ている者(最高我)をこれ(個我)は見るのである) Cs. paśyadrasṭrte kūtasthavirodha ity āśaṅkyāha — na tu paśyati / na śaḍviṃśo 'smadādivat kāryabhūtena jñānena paśyaty eva, kiṃ tu paśyaṃs tu savitṛvat svarūpabhūtajñānaprakāśena, ato na kauṭasthyavirodhaḥ / anupaśyati ācāryopadeśāntaram jñāti / (観察対象を観察するという性質は、不動性と対立する(のではないか)、と疑問に思って、na tu paśyati、と言ったのである。第二十六は、我々のように、結果としてある知識によって見るのではない。そうではなくて、太陽のように、自分の本質である知識の照明によって、見るのである。従って不動性と対立はない。anupaśyati とは、師匠の教示の直後に知る、という意味である)

<sup>87</sup>P. paramo mama B.,K.: parato mama

<sup>88</sup>pañcaviṃśo 'bhimanayeta Ca. pañcaviṃśaḥ abhimanṛtayātmānaṃ manute / (第二十五は、自意識性によってアートマンを考えるのである)

<sup>89</sup>P. na caturviṃśako 'grāhyo B.,K.: na caturviṃśako grāhyo Cs. (rading *caturviṃśako grāhyaḥ*) avyaktasvabhāvaś caturviṃśako manujair viśiṣṭādihikāribhiḥ na ātmatvena grāhyaḥ, tasya cācetanasya cetanasvabhāvavirodhāt / (未顕現を本性とする第二十四は, manujair, すなわち, すぐれた職務をもつ(?) 人々によって, アートマンとして捉えらるべきではない。その知をもたない者は, 知を本性とするものと対立するのであるから)

<sup>90</sup>P. matsyevodakam anveti B. matsyaś codakam anveti K. matsyo vodakam anveti

<sup>91</sup>P. sasnehaḥ saḥavāsāc ca sābhimānaś ca B.,K.: sa snehāt saḥavāsāc ca sābhimānāc ca

<sup>92</sup>kālasya Ca. kālasya, kālenety arthe śaiśikī śaṣṭhī / (kālasya とは、時の経過によって、という(具格の)意味で用いられている、残余の意味での属格である)(Cf. Pāṇini 4.2.92)

<sup>93</sup>P. mamatvenābhisaṃvṛtaḥ B.,K.: samatvenābhisaṃvṛtaḥ 次の unmajjati との関連では、B.,K. の samatvenābhisaṃvṛtaḥ (同一性に覆われた時には)の読みのほうがわかりやすい。P. は、mamatve nābhisaṃvṛtaḥか。

<sup>94</sup>unmajjati Cn. majjanonmajjane saṃsāramokṣau / (沈むことと浮くこととは、輪廻と解脱のことである)

<sup>95</sup>anyo 'ham anya eṣa Ca. eṣaḥ, prākṛto vargaḥ / (eṣaḥ 「これは」とは、ブラクリティに属するものの群である) Cn. arthādhī / ((eṣaḥとは)物などである)

<sup>96</sup>kevalībhūtaḥ Cs. kevalībhūtaḥ, prakṛitatkāryasaṃsargarahitaḥ / (kevalībhūtaḥとは、ブラクリティとその結果との結びつきを欠いている、という意味である)

<sup>97</sup>P. anyaś ca rājann avaras B. anyaś ca rājanyavaras K. anyaś ca rājan paramas Cn. (reading *rājanya varah*) varah śaḍviṃśaḥ / (varahとは、第二十六は、という意味である) B.,K. とともに、ここでは第二十六が意図されている。P. の *avarah* という読みでは、同様に解するのは難しいが、*avara* を *vara* をもたない、すなわち、上位のもののない、というように解して、第二十六を指すと解した。もし *avara* が、低位のものを意味しているならば、それは第二十四(=ブラクリティ)になるが、それでは cd 句が理解しがたい。ただし、次の二つの脚注に見られるように、Cs. と Ca. は、ブラクリティとブルシャの異同を念頭に置いて解釈している。

二十五)に存在するために<sup>98</sup>、善き人々は、(第二十六と第二十五は)同一である、と見るのである<sup>99</sup>。(Sandhi irregular: *anupaśyanti eka eveti*<sup>100</sup>) (Cf.Hopkins[Great Epic]: doctrine of the twenty-sixth, p.137.16)

(76) 従ってこのように、(善き人々は)第二十五を不動の者と認めることはない<sup>101</sup>。誕生と死の恐怖におびえ、それ(第二十六)を最後の抛り所とする (*tatparāyaṇāḥ*) 清浄なヨーガ行者たちとサーンキヤに従う人々は、カーシュヤパよ、(最高者として)第二十六を見るのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: doctrine of the twenty-sixth, p.137.19)

(77) 彼が独存者となって第二十六を見る時、彼は一切を知る知者であり、再び誕生を得ることはない。

(78) このように、覚醒しないもの<sup>102</sup>、覚醒つつある者、覚醒した者について<sup>103</sup>、無垢な者よ、私は、天啓聖典の教示に基づいて正しく汝に語った。

(79) その者 (*yo* 前詩節の覚醒した者?) は、可見のもの・不可見のもの、安穩、真実<sup>104</sup>、独存者・非独存者、原初の存在を<sup>105</sup>、そして、第二十五より上位であるものを<sup>106</sup>見るであろう<sup>107</sup>、カーシュヤパよ。

ヴィシュヴァーヴァスは言った。

(80) 吉祥な真理、そして安穩と神の始源を、あなたは正しく適切に語った。尽きない幸運があなたにあらんことを。常に英知によって英知をそなえたあなたに敬礼する<sup>108</sup>。  
(韻律: *Śālinī*<sup>109</sup>)

<sup>98</sup>P.,K.: *tatsthatvād B. tatsthānāc Ca. tatsthatvāt, tasyām prakṛtāv avidyāyām sthitavāt* / (*tatsthatvāt* とは、それ、すなわち、プラクリティの中に、すなわち、無知の中に、存在するため、という意味である)

<sup>99</sup>*anupaśyanti eka eveti sādhaḥ Ca. eka eva, prakṛtyā abhinna iva* / (*eka eva* とは、プラクリティと異ならないかのごとく、という意味である)

<sup>100</sup>Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, p.14 に当たると思われるが、*-i e-*のケースを挙げていない。 Cf.MBh.XII.299.14.

<sup>101</sup>*tenaitan nābhinandanti Cs. (reading te nainam nābhi-)* *sāṃkhyayogāś ca tan na manyante, enam pañcaviṃśakam, evam acyutaṃ, īsvaram nābhijānanti iti na, kiṃ tu ekatvam eva te 'pi jānanti* / ((*te* すなわち)サーンキヤとヨーガに従う人々は、そのように考えない。 *enam*, すなわち、第二十五を、そして *acyutaṃ*, すなわち、自在神を、認めないのではない。そうではなくて、*te 'pi* 彼らもまた、(第二十五と自在神は)同一であると認識しているのである)

<sup>102</sup>*apratibuddhaś ca Cn. apratibuddhaḥ, pradhānam* / (*apratibuddhaḥ* とは、第一原因である) *Ca. avyaktasvabhāvaḥ* / (未顕現を本性とする者である)

<sup>103</sup>*buddho Cn. buddho, brahma* / (*buddhaḥ* とは、ブラフマンである) *Cs. buddhaḥ, ṣaḍviṃśaḥ paramātmety arthaḥ* / (*buddhaḥ* とは、第二十六は、すなわち、最高我は、という意味である)

<sup>104</sup>*P. kṣemaṃ tattvaṃ B.,K.: kṣemyaṃ tattvaṃ Cn. kṣemyaṃ kṣemāya sādhu* / *tattvaṃ, dṛgdrśyayor anyatvaṃ ca* / (*kṣemyaṃ* とは、安穩に叶うものを、*tattvaṃ* とは、見と見の対象の相違性を、という意味である)

<sup>105</sup>*kevalākevalaṃ cādyam Cn. kevalaṃ sāksyeṇāpi nirumuktaṃ, akevalaṃ sāksirūpam, ādyam jagatkāraṇam* / (*kevalam* とは、証言によっても解脱した者を、*akevalam* とは、証人の姿を、*ādyam* とは、世界原因を、という意味である)

<sup>106</sup>*P. cādyam pañcaviṃśat paraṃ ca yat B.: cādyam pañcaviṃśaṃ paraṃ ca yat K. cānyat pañcaviṃśaṃ paraṃ ca yat Cn. paraṃ, mahadādikāryam* / (*paraṃ* とは、大などの結果を、という意味である)

<sup>107</sup>*P. yo 'nuopaśyet B.,K.: yo na paśyet*

<sup>108</sup>*P. namas te B. manas te K. namasye*

<sup>109</sup>a,c,d 句の第 3 音節, c 句第 5 音節が短音節となっている。

ヤージュナヴァルキヤは言った。

- (81) このように言って、彼の偉大な者は、吉祥な姿によって輝きつつ、挨拶し、私を右繞して、最高の満足によって満足して<sup>110</sup>天に昇った。(韻律: *Triṣṭubh*<sup>111</sup>)
- (82) (そのガンダルヴァは) ブラフマー神など天空を行く者たちの住居において、インドラのごとき人よ、下方に住む者たち、そしてまた、ひたすら安穩の道を努める者たち<sup>112</sup>のところで (*tatraiva*)、その教えを示しつつ (天に昇ったのである)。(韻律: *Śālinī*<sup>113</sup>)
- (83) サーンキヤに従うすべての人々は、サーンキヤの教義に喜び、同様に、ヨーガを行う人々は、ヨーガの教義に満足している。他にも解脱を願う人々がいるが、彼らのために知識によって得られる (*jñānadr̥ṣṭam*) この教えがある。(韻律: *Śālinī*)<sup>114</sup> (Cf. Hopkins [Great Epic]: teaching newly inculcated in contrast to the *Sāṃkhyas* and *Yogas*, p.138.1)
- (84) 人々にとって<sup>115</sup>、解脱は知識から生じ、無知からは (解脱は) ない、とこのように言われた、インドラのごとき人よ。それ故、それによってアートマンを誕生と死から解き放つであろう知識が正しく求められるべきである。(韻律: *Śālinī*)<sup>116</sup>
- (85) 知識を、バラモンから、あるいはクシャトリヤから、ヴァイシャから、さらには賤しいシュードラから得ても、直ちに信づべきものとして常に信じることによって、誕生と死は、信ある者には<sup>117</sup>入りこまないであろう。(韻律: *Śālinī*)<sup>118</sup>
- (86) あらゆる種姓は、ブラフマンから生じたバラモンである。すべての人々は、常に、ブラフマンと声を出す (*vyāharante*)<sup>119</sup>。私は、ブラフマンの認識によって真実と聖典 (*śāstra*) を語る。このように一切はすべてブラフマンである。(韻律: *Śālinī*)<sup>120</sup> (Cf. Hopkins [Great Epic]: Yoga, a doctrine of emancipation for all, p.114, fn.2)
- (87) ブラフマンの口からバラモンたちが生じ、両腕からクシャトリヤたちが生じた。ブラフマンの臍ではヴァイシャたちが、足からはシュードラたちが生じた。あらゆる種姓は、これとは別様に知られるべきではない (*nānyathā veditavyāḥ*)。(韻律: *Śālinī*)<sup>121</sup>

<sup>110</sup> P. *tuṣṭāś ca tuṣṭyā parayā* B., K.: *dr̥ṣṭāś ca tuṣṭyā parayā*

<sup>111</sup> 全体は *Śālinī* に近い音韻であるが、各句とも不規則な音節を含んでいる。c 句は、*Indravajrā* に一致している。

<sup>112</sup> *samyak kṣemyaṃ ye pathaṃ saṃśritā vai* Cn. *pathaṃ, panthānam* / (*pathaṃ* は、*panthānam* が正しい語形で、道を、という意味である) Cs. *kṣemyaṃ pathaṃ, mokṣasādhanam jñānamārgam* / (*kṣemyaṃ pathaṃ* とは、解脱の手段である知識の道を、という意味である)

<sup>113</sup> a, b 句は最終音節が短音節、c 句は第 3 音節が短音節になっている。最終音節が短音節であることについて、Hopkins の ‘The prior pāda of the hemistich may end in brevis’ という指摘がある。(Hopkins [Great Epic]: p.319.24)

<sup>114</sup> a, b, d 句は最終音節が短音節になっている。前注の Hopkins の指摘参照。

<sup>115</sup> P. *pauruṣāṇām* B., K.: *rājasimha*

<sup>116</sup> b 句のみ最終音節が短音節になっている。

<sup>117</sup> *śraddhinam* Cn. *śraddhinam, ādantād api matvarthīya inih* / ((*śraddhin* の) 接辞 *in* は、(*śraddhā* が短母音 a ではなく) 長母音 ā を語末としているとしても、所有を意味すべきである) (Cf. *Pāṇi Sūtra* 4.2.115)

<sup>118</sup> b 句は第 5 音節が短音節になっている。

<sup>119</sup> K. は、b 句の後に、次の行を挿入している。

*yenātmānam mokṣayej janmamṛtyos tattvaṃ śāstram brahmapudhyā bravīmi* / (=P.84d + P.86c)

<sup>120</sup> a, b, c 句は最終音節が短音節であり、さらに b 句は第 9 音節が長音節である。Cf. Hopkins [Great Epic]: light syllable before *br*. (b 句 *sarve nityam vyāharante ca brahma*), p.243.14, Emergent Stanzas, *Śālinī*, p.319.23, 28-31)

<sup>121</sup> a 句は第 3 音節が短音節になっている。

- (88) 人々は、無知のために、それぞれ行為の母胎 (karmayoni 身体) を享受し、王よ、(その後) 死 (abhāva) に至る。同様に、知識を欠いた種姓の者たちは、恐ろしい無知のために、物質的な (行為の) 母胎の網 (prakṛtaṃ yonijālam) に落ちるのである。(韻律: Triṣṭubh<sup>122</sup>)
- (89) それゆえ、知識があらゆる面から求められねばならない。そして、知識はあらゆるところにある<sup>123</sup>と、このように私はあなたに言った。かつて存在したバラモン<sup>124</sup>、そして存在した他の者<sup>125</sup>に対して、再生族のインドラたちは<sup>126</sup>、解脱は永遠である、と語ったのである。(韻律: Śālinī)
- (90) 汝が尋ねたことに対して私は真理にかなう仕方では教示した。これによって (tad) 愁いを離れて生きよ。かくして、王よ、追究の終結に (arthasya pāram) 至るべし。(以上ですべては) 正しく述べられた。この世で常にあなたに繁栄あらんことを<sup>127</sup>。(韻律: Śālinī<sup>128</sup>)

ビーシュマは言った。

- (91) このように英知あるヤージュナヴァルキヤ仙によって教えられた時、ミティラーを統治する王は、歓喜に満たされた。
- (92) その最勝の尊者が、(王によって) 右繞されて、去った時、人々の王ダイヴァラーティ (ジャナカ) は、解脱を知る者としてそこに座った。
- (93) 王は、バラモンたちに、一千万頭の牛、そして黄金を与え<sup>129</sup>、さらに両手一杯の宝石を与えた。
- (94) そしてミティラーの王は、ヴィデーハの王位を息子に譲り、苦行者の教えを称賛しつつ過ごした。(Cf. Strauss[1912]: *nivṛtti*, *Werklosigkeit und Gleichmut Janaka's*, p.251(59).7)

<sup>122</sup>各句とも Śālinī に近いが、それぞれ不規則な音節を含んでいる。a 句は第 3 音節が短音節、b 句は最終音節が短音節、c 句は第 1 音節が短音節、d 句は 12 音節である。Cf. Hopkins[Great Epic]: *Emergent Stanzas, isolated vaiśvadevī pāda* reckoned as *triṣṭubh pāda*, p.320.19.

<sup>123</sup>sarvatrastham N. sarvatrastham sarvavarṇagatam / (sarvatrastham とは、あらゆる種姓にある、という意味である)

<sup>124</sup>P. tasthau brahmā B.,K.: tatstho brahmā

<sup>125</sup>tasthivāms cāparo Cn. aparah, kṣatriyādih / (aparah とは、クシャトリアヤなどは、という意味である)

<sup>126</sup>P. dvijendrāḥ B.,K.: narendra

<sup>127</sup>P. svasti te 'stv atra nityam B.,K.: svasti te tvat tu nityam

<sup>128</sup>b 句は最終音節が短音節になっている。

<sup>129</sup>P.,K.: sparśayāmāsa hiranyasya tathaiva ca B. sparśayāmāsa hiranyaṃ tu tathaiva ca Ca. sparśayāmāsa dattavān / yadvā, ekam eva vibhajya sarvebhyo dadau / (sparśayāmāsa とは、与えた、という意味である。あるいは、一つのを分割して、全員に与えた、という意味である)

- (95) (彼は) サーンキヤの知識を、そしてヨーガの教義を (yogaśāstram) すべて学び、法・非法を<sup>130</sup>世俗的なこととして<sup>131</sup>非難しつつ、王の中の王よ、
- (96) 彼は、「(自分は)無限である。そして永遠であり唯一である」と考えて法と非法を、善と悪を、真と偽を、そして、
- (97) 誕生と死を、このように (tad) 世俗的なことと (prākṛtam) と考えた。「この世は未顕現のごときブラフマンの行為である」と<sup>132</sup>常に、人々の王よ、
- (98) ヨーガ行者たちとサーンキヤに従う人々は、自らの教義に基づく証相をもって (svaśāstrakṛtalakṣaṇāḥ)、見るのである。なぜならば、ブラフマンは、願わしきことと願わしくないことを離れて<sup>133</sup>、最高より高く存在したからである<sup>134</sup>。賢者たちはそれを永遠と言い、清浄であると言った<sup>135</sup>。それゆえ、あなたは清浄であるべし。
- (99) あるものが与えられる、与えられたものを得る、あるものがを考える<sup>136</sup>、あるものが与え、そして受け取る、人の中で最勝の者よ。(これらの行為は)未顕現が与え<sup>137</sup>、そしてそれ(未顕現)が受け取る、ということである。
- (100) アートマンは、アートマンのみに属し、一つである。あなたよりすぐれた何か他のものが存在するであろうか<sup>138</sup>。常にこのように考えるべし。他様に考えてはならない。
- (101) 未顕現を知らない者、それがグナを伴うか伴わないか知らない知恵なき者は、もろもろの巡礼ともろもろの祭式を行うべきである<sup>139</sup>。(Sandhi irregular: *sevitavyāvīpaścītā* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8 Double sandhi, 1.8.7 -ā < / -ās a-/, p.43.11)
- (102) もろもろのヴェーダ学習によって、あるいはもろもろの苦行によって、あるいはもろもろの祭式によって、未顕現の領域を<sup>140</sup>得ることはない、クル族の子よ。未顕現を知った後<sup>141</sup>である、大地の主よ。

<sup>130</sup>dharmādharmau Cs. adharmavad dharmasyāpi bandhanahetutvāt / (非法と同様、法もまた束縛の原因であるから)

<sup>131</sup>prākṛtam Cn. prākṛtam, āvidyakam / (prākṛtam とは、無知に属するものとして、という意味である)

<sup>132</sup>P.,K.: brahmāvyaktasya karmedam iti B. vyaktāvyaktasya karmedam iti brahmāvyaktasya がはっきりしない。B. の読み「この世は顕現と未顕現の行為である」は、わかりやすい。第 97, 98 詩節から、サーンキヤとヨーガは、ブラフマンを独自の存在と認めていない、ということになる。

<sup>133</sup>iṣṭāniṣṭaviyuktam Cs. iṣṭāniṣṭaviyuktam, viśayasamparkakṛtasukhaduḥkhavihīnam / (iṣṭāniṣṭaviyuktam とは、対象との接触によって生じた安楽と苦を欠いている、という意味である)

<sup>134</sup>tasthau brahma parāt param Cn. tasthau, sthāṇuvad acalam astīty arthaḥ / (tasthau とは、柱のごとく動かずに存在する、という意味である)

<sup>135</sup>P. nityam tam āhur vidvāṃsaḥ śucis B.,K.: nityam tam āhur vidvāṃsaḥ śuci

<sup>136</sup>この P.ab 句のあとに、K. は次の行を挿入している。

avyakteneti tac cintyam anyathā mā vicintaya /

(それは、未顕現によって、と考えられるべきであり、他の様に考えてはならない。)

<sup>137</sup>P. dadāty avyaktam evaitat B.,K.: dadāty avyakta ity etat

<sup>138</sup>P. ko 'nyas tvatto 'dhiko bhavet B.,K.: ko 'nyas tasmāt paro bhavet

<sup>139</sup>P. sevitavyāvīpaścītā B.,K.: sevitavyāvīpaścītā

<sup>140</sup>P. 'vyaktasamsthānam B.,K.: 'vyaktikaṃ sthānam Ca.(gloss: avyaktikaṃ avyaktarūpaṃ, mokṣasamsthānam /) (avyaktikaṃ とは、未顕現の姿を、すなわち、解脱の境地を、という意味である)

<sup>141</sup>jñātvā avyaktam Ca. jñātvā avyaktam, śarīrādi ātmatayā jñātvā / (jñātvā avyaktam とは、身体などをアートマンとして知って、という意味である)

- (103) 同様に、「大」の領域、自我意識の領域、さらに自我意識よりも高くに、もろもろの領域もまた<sup>142</sup>獲得するであろう。
- (104) しかし、聖典に専心する者たちは、未顕現よりも上位の永遠の存在を知り、誕生と死を離れた、あらゆる有からの、そして無からの遠離を(獲得するであろう)<sup>143</sup>。
- (105) このことを私は、かつてジャナカ王から得た。ジャナカ王はまたヤージュナヴァルキヤ仙から得たのである、王よ。すぐれているのは知識であり<sup>144</sup>、もろもろの祭式はそうではない。人は、知識によって難路を渡るのである。もろもろの祭式によって(渡るの)ではない。(韻律: Indravajrā)
- (106) 誕生と死とが難路である、王よ。知識を知る者たちは、(難路は)外界にあると<sup>145</sup>語ることはない。人々は、もろもろの祭式、もろもろの苦行、もろもろの禁戒、もろもろの誓約によって、天界に達した後、(再び)地上に落ちるのである。(韻律: Upajāti<sup>146</sup>)
- (107) それ故、最高の、偉大な、清浄な、吉祥な解脱を、穢れなき浄化具として尊崇せよ(upśasva)。王よ、知田者を知り<sup>147</sup>、知識の祭式を真実として尊崇した後(upāsyā)、あなたは聖仙となるであろう。(韻律: Upajāti<sup>148</sup>)
- (108) かつてヤージュナヴァルキヤ仙は、ジャナカ王に秘密の教え(upaniṣad)を伝授した。ジャナカ王は、(そこで)永遠にして不変とみなされた(upagaṇiṭaśāśvatāvyaṃyam)、吉祥にして憂いなき不死性に達したということである(iti)<sup>149</sup>。(韻律: Puṣpītāgrā<sup>150</sup>)

[307 章] (B.319 章, C.11837-11851, K.324 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 権力(aiśvarya)、あるいは大きな富、あるいは長命を得た後、人はどのようにして死を超えるべきであろうか、パーラタ族の雄牛よ。
- (2) 大苦行によって、あるいは祭式によって、あるいは伝統的知識によってであろうか。あるいは、不死の妙薬(rasāyana)の服用によってであろうか。何によって人は老と死に近づかないのであろうか<sup>151</sup>。(Cf. 水野 [2014]: *rasāyana*, p.63.4)

<sup>142</sup>sthānāni Cs. sthānāni, indrādīpadāni / (sthānāni とは、インドラなどの地位を、という意味である)

<sup>143</sup>P. janmamṛtuviyuktaṃ ca viyuktaṃ sad asad ca yat B.,K.: janmamṛtuvimuktaṃ ca vimuktaṃ sad asad ca yat

<sup>144</sup>jñānaṃ viśiṣṭam Ca. jñānam eva viśiṣṭam, na karma / (すぐれているのは知識のみであって、祭式ではない)

<sup>145</sup>P. bhūtīkaṃ B.,K.: bhautīkaṃ Ganguli: Literally, 'these are not obstacles by external nature', (p.55, fn.1)

<sup>146</sup>a 句は、\_\_\_\_ \_ \_\_\_\_ \_ \_\_\_\_ \_ となっている。Cf. Hopkins[Great Epic]: Appendix C., Illustrations of Epic Triṣṭubh forms, No.15, p.465.17

<sup>147</sup>P. kṣetrajñavit B.,K.: kṣetraṃ jñātvā

<sup>148</sup>a 句は 12 音節、c 句は \_\_\_\_ \_ \_\_\_\_ \_ \_\_\_\_ \_ となっている。a 句は c 句に短音節を付加したも

の。c 句に関しては、Hopkins[Great Epic]: Appendix C., Illustrations of Epic Triṣṭubh forms, No.6, p.460.36 参照。

<sup>149</sup>P. ṛchatitī B.,K.: archatī P. の iti は、upaniṣad の内容を指示しているか。

<sup>150</sup>d 句 (even quarter) の最終音節が短音節になっている。Cf. Hopkins[Great Epic]: Puṣpītāgrā, p.346.28.

<sup>151</sup>P. kair nopaitī B.,K.: kair nāpnotī

ビーシュマは言った。

- (3) ここでも人々は、この古潭を語る。乞食者パンチャシカとジャナカ王のこの点についての対話を (iha saṃvādam)。 (Cf.Hopkins[Great Epic]: Pañcaśikha, p.144.15)
- (4) ヴィデー八王ジャナカは、ヴェーダの最上の知者であり、ダルマの意味についての疑問を断ち切った偉大な聖仙パンチャシカに尋ねた。
- (5) 「尊者よ、人は、いかなる行為 (vr̥tta) によって、老と死とを超えることができるのですか。苦行によってですか。あるいは認識 (buddhi) によってですか。あるいは祭式によってですか。あるいはヴェーダの知識によってですか。」
- (6) このように言われて、目に見えぬものを知る<sup>152</sup>彼はヴィデー八の王に答えた。「この(老と死の)両者が止まることはない。しかし全く止まらないということもない。
- (7) 日々は止まらない、月々は止まらない、またさらに夜々も止まらない。このように、変化する者は、長い間変らない道を<sup>153</sup>進むのである。(Cf.MBh.XII.28.48ab,49ab)
- (8) あらゆる生き物の終息 (samuccheda) は、いつも水の流に運ばれているかのようである。老死という(二匹の)鰐のいる時 (kāla) の大海の中で、舟なく、沈みつつ運ばれている者には、誰も近づくことはないのである<sup>154</sup>。(Cf.MBh.XII.28.43cd)
- (9) この者には誰も存在せず、この者は誰にとっても存在しないのである。道においては、このように妻たちや他の親戚たちと共に一緒にいる。しかし、最後まで共に住むということは<sup>155</sup>誰によってもかつて達成されたことはない。(Cf.MBh.XII.28.39, 50cd)
- (10) 人々は、時の進行と共に (kālena) 繰り返し誕生し、何度も叫び声をあげ、繰り返し投げ捨てられるのである。あたかも風によって雲の塊たち(が生じては消えるか)のよう
- (11) 老いと死は、生き物たちの捕食者である。あたかも二匹の狼のごとくである。力ある者たちの、力弱き者たちの、小さな者たちの、そして大きな者たちの(捕食者である)。
- (12) このような生き物たちにおいては、そして常に束の間存在する生き物たちにおいては<sup>156</sup>、どうして誕生した者たちに対して喜ぶようか。またどうして死んだ者たちに対して苦しむべきであろうか。

<sup>152</sup>parokṣavit Cs. parokṣavit, kālajñāḥ / (parokṣavit とは、時を知る者は、という意味である)

<sup>153</sup>cirāya dhruvam adhvānam Cp. adhvānam, saṃsārapatham / (adhvānam とは、輪廻の道を、という意味である) Cs. janmamaraṇādiprabandham / (誕生と死などの連続を、という意味である)

<sup>154</sup>P.,B.: abhipadyate K. ativartate

<sup>155</sup>āyam atyantasaṃvāso Cs. atyantasaṃvāsaḥ, avināśī saḥavāsaḥ / (atyantasaṃvāsaḥ とは、永久に共に住むことは、という意味である)

<sup>156</sup>P.,K.: evaṃbhūteṣu bhūteṣu nityabhūtādhruveṣu ca B. evaṃ bhūteṣu bhūtātmā nityabhūto dhruveṣu ca Cs. (gloss: kāryakāraṇasaṃghātādhyakṣaḥ) bhūtātmā / (原因結果の集積の監督者が、bhūtātmā 個我である)

叙事詩の宗教哲学 (XXX )

- (13) 私はどこから来たのか。私は誰か。私はどこへ行くのか。また私は誰のものか。何の中に存在しているのか。将来どこに生じるのか。(これらの本質的ではない問に加えて?) 汝は何ゆえ何を嘆くのか<sup>157</sup>。(Cf.MBh.XII.28.40; Strauss[1912]: Vergänglichkeitsgedanke als Motiv zur Tätigkeit, p.216(24), fn.1)
- (14) (汝の他に) 天界を見る者はおらず<sup>158</sup>, 同様に地獄を見る者もない。人は, もろもろの聖典 (āgama) を逸脱することなく, 布施すべし。そして祭式を行うべし。」(Cf.MBh.XII.28.41c, 53ab)

<sup>157</sup>kasmāt kim anuśocasi この詩節には複数の問が見られるが, おおむね「私」が主語となっている。しかしこの問だけ「汝」が主語になっている。Deussen は, この間をつなくために, [Da alle diese Fragen den Ātman nicht betreffen] と補って訳している。(p.672, v.14) MBh.XII.28.40c は, *kasmāt kam anuśoceyam* と読んでおり, 問はすべて「私」の問題として理解されている。

<sup>158</sup>P.,K.: na hy asti B. ko 'nyo 'sti

(2015年12月22日 受付)  
(2016年 3月 9日 受理)